僕の知らない世界にて

枯れた樹海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の知らない世界にて

【Ｎコード】
Ｎ６２７６Ｘ

【作者名】
枯れた樹海

【あらすじ】
神によって少年はリリカルなのはの世界に転生した。
自分が知らない世界で彼はどう生きるのか。

作者はこれが処女作です。文才もあるわけがないので、駄文で、表現の間違いが多いと思いますが、最後まで見守っていただけると幸いです。
あと、原作ブレイク、ハーレム、チート、キャラ崩壊などが嫌な方は読まない方がいいかと思います。

なお、誤字や脱字、表現の間違い、矛盾などは連絡がありましたら直しますのでよろしくお願いします。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

主人公設定

リリィ・ナイトメア

年齢
７歳

性別
男の娘

身長
ヴィータより少し低い

体重
ヴィータより少し軽い

容姿
Ｆａｔｅのセイバー

魔導士ランク
ＳＳＳランク（ＯＶＬ時はＥＸ）

神からもらった主な能力
・テイルズオブシリーズに出てくる術技・秘奥義を全て使用可能
全てを使用可能とあるが実際はその技を登録しているデバ

イスを使わないといけない為、全ての技を使用できるという訳ではない

・全て遠き理想郷（アヴァロン）
　Ｆａｔｅに出てくる宝具。
　リリィの自己治癒力の補助をしている。

レアスキル
『オーバーリミッツ（ＯＶＬ）』
一時的に魔力を無限にする。
解除された時に一気に反動が来てしばらく動けなくなる。

デバイス
ベルカ・ミッド混合式ハイブリッド型インテリジェントデバイス『レディアント』

特技
スポーツ（特に武道）、歌（歌う時は声帯模写をして歌う）、楽器演奏、スケッチ、家事全般（特に料理）

解説
神が二次創作を書きたいが為に転生させられた少年。
前世での享年は１３歳。
前世ではかなり酷い人生を送っていたらしい。
前世についてはいつか語られるかもしれない…
口調は割と穏やかだが、女神様曰く、無理をしているとのこと。
天然のフラグメーカー。

主人公設定（後書き）

デバイス設定（前書き）

続いて、デバイス設定です。

デバイス設定

『レディアント』
ベルカ・ミッド混合式ハイブリッド型インテリジェントデバイス

ジョブチェンジシステムというものを搭載しており、テイルズオブザワールドレディアントマイソロジーに出てくる職業になれる。
バリアジャケットはそれぞれの職業ごとに違い、格好はそれぞれの職業のレディアント装備。

ウォリアー（戦士）
武器は斧
クロスレンジ専用。手数が少ないがそれをカバーできるだけの一撃の重さがある。

フェンサー（剣士）
武器は片手剣
クロスレンジが主流。手数が多い分一撃の威力が軽い。

グラップラー（格闘家）
武器はナックル
クロスレンジが主流。投げ技を使える。リーチが短い分手数が多く、敏捷性は高い。

アーチャー（狩人）
武器は弓矢
ロングレンジ、アウトレンジが主流。唯一秘奥義を二つもつ職業。

シーフ（盗賊）
武器は短剣
クロスレンジが主流。敏捷性が高く、相手から物を奪う技を使える。

ウィザード（魔術師）
武器は杖
ロングレンジ専用。遠距離、中距離攻撃にはかなり長けているが接近戦には弱い。

ヒーラー（僧侶）
武器は杖
援護専用。治癒術と補助術に長けている。が攻撃がダメダメ。

ラージフェンサー（大剣士）
武器は両手剣
クロスレンジ専用。攻撃力がずば抜けて高いがモーションが大きく隙が大きい。

デュアルフェンサー（双剣士）
武器は片手剣と短剣の二刀流
クロスレンジが得意。手数がかなり多く、隙が少ないが、その分一撃が軽くなっている。

ガンマン（ガンマン）
武器は2丁拳銃
クロス、ミドル、ロング、アウトどこでもうまく立ち回れる万能型。

モンク（モンク）
武器はナックル
クロスレンジが得意。リーチが短いが敏捷性がある。治癒術も使え

る。

セージ（ビショップ）
武器は杖
ロングレンジ専用。広域攻撃に長けており、
治癒術や補助術で援護もできる。

マジックフェンサー（魔法剣士）
武器は片手剣
クロスレンジ、ロングレンジどちらにもうまく対応できる。治癒術
も使える。

ニンジャ（忍者）
武器は片手剣
クロスレンジが得意。敏捷性が高く、トリッキーな攻撃が多い。

パイレーツ（海賊）
武器は短剣と拳銃
クロス、ミドル、ロング、アウトどこでもうまく立ち回れる万能型。
トリッキーな攻撃が多い。

パラディン（聖騎士）
武器は両手剣
クロスレンジ専用。治癒術や補助術にも長けている。

デバイス設定（後書き）

こんな感じのデバイスになりましたが、作者の実力では全ての職業を使いこなせないと思います。
すみません。

第０話　「神って意外とフリーダム」（前書き）

どうも、枯れた樹海です。

記念すべき初投稿です。

駄文ですが、よろしくお願いします。

第0話　「神って意外とフリーダム」

「貴方には転生してもらいます」

僕は今、辺り一面真っ白な空間に先ほど訳の分からないことを言いだした神と名乗る若い女性と向き合った状態でいる。

この人、頭のネジ何本か取れているんじゃないのかな？

「取れてません！！」

心を読んだ！？

怖っ！！読心術とか…この人絶対人間じゃないよ…人の皮を被った化け物だよ…

「化け物じゃありません！！」

また読まれた！？

やっぱりこの人化け物だよ…僕を騙して食べる気なんだよ…

「食べません！！……とにかくこのままじゃ話が進みませんからふざけるのは程々にしてくださいね」

はーい

で、何で転生なんてしないといけないの？

「それはですね…なんといいますか…そのですね…」

何吃ってんのさ、はっきり言いなよ

「実は…最高神ゼウスに…

『儂、転生物の二次創作書こうと思っとるから、そのモデルとして、適当に死んだ奴の中から1人選んで、そやつに好きなだけチートな能力を与えて、リリなのの世界へ転生させてくれ』

…と言われまして…」

神様ってフリーダムなんだね…

「すみません…」

別にいいよ、もう一度人生をやり直せるんだし…

それで、リリなのって何？

「知らないんですか？貴方の世界ではアニメが放送されていましたよ？」

あ、そうなんだ…

僕ってアニメとかそういうのに疎いから…

「そうなんですか…でもそれじゃあ能力とか決める時に困るんじゃ…」

確かにそうだね…

あっ、でもテイルズだけはしてたから、それの『術技、秘奥義を全て使える』とかでいいんじゃないかな？

「そうですね、一つ目の能力はそれにしましょうか…」
一つ目って事はまだ他にも考えた方がいいのかな？
「なるべく超が付くくらいチートな転生者にしろと言われていますので」
う～ん…そうだねぇ……
じゃあ、『前世の僕の身体能力とか知識とか内面的要素を転生後も引き継げる』ってのは？
「確かに貴方の場合はそうすると結構チートな能力になりますね」
そうでしょ？
あとは『努力さえすれば何処までも実力が伸びていき、それに限界がない』とかもつければ結構なチート能力になるんじゃないかな？
「貴方意外と真面目に考えているんですね」
まあねー
で、能力はこれくらいでいいかな？
これ以上思いつきそうにないし…
「そうですね。では能力はここまでにして、次は貴方のデバイスを考えましょう」
デバイス？
「そういえば貴方はリリカルなのはを知らないんでしたね」

うん、だから先にその世界のことを簡単に教えて欲しいんだけど…

「分かりました。…リリカルなのはというのはですね……」

～説明中～

へぇ、魔法なんて存在するんだ…
それに、世界がいくつも存在するなんて…
何かちょっと信じられないよね…

「とにかく、今説明したように魔法を使うにはデバイスというものが必要なので、どんなものがいいか考えてください」

う～ん、そうだなぁ…

～数分後～

……っとまあ、こんなのでどうかな？

「まあ、いいと思いますけどこれではテイルズに出てくる術技、秘奥義を全部は使えないのでは？」

いいよ、別に。

どうせ全ての術技とかを使いこなせる訳がないし…

「確かにそうでしょうけど…」

まあ、ゼウスさんがこれじゃ物足りないって思うんだったら、好きに能力を付け足すなり、他のデバイスを作って届けるなりでいいよ。

「分かりました。デバイスは出来上がり次第貴方に届けます」

うん、お願いね

「ではそろそろ転生してもらいましょうか…」

あっ、後一つだけいいかな？

「なんでしょう？」

あのさ、『前世の身体能力とかを引き継げる』って言ったけど、不幸体質だけは引き継がないでもらえるかな？

「……ええ、分かりました」

ありがとう。

じゃあ、転生させてもらえるかな？

「分かりました。では、新たな人生を思う存分楽しんで下さいね」

うん。

光が僕を包んでいく。

次の人生はどうなるのかな…？
僕は二度目の人生にたくさんの期待と少しの不安を持ったまま、一度意識を手放した……

第0話　「神って意外とフリーダム」（後書き）

いきなり駄文でしたね…
すみません
初めて書くのでこんなので良かったのか不安です…

第０．５話　「最高神登場？」（前書き）

今回はほぼ会話だけです

しかも、自分で書いててよく分からない展開に…

第０．５話　「最高神登場？」

「終わったのう」

先ほどまで少年がいた空間に１人の老人が現れて少年を転生させた女性の神に声をかける。

「ええ、それにしても少し心配ですね…」

「何がじゃ？」

「彼が転生して普通の生活を送れるかどうかです…前世の記憶を見ましたが、あの様な人生を送ってきた者が転生しても、普通に生きられないんじゃないかと…」

「まあ確かに、あやつの前世は酷く残酷な物じゃったからのう…じゃが儂は大丈夫だと思うぞ？」

「何故ですか？」

「それは内緒じゃ」

「なっ、教えて下さいよ！」

「じゃあ、ヒントを出してやるから自分で考えるんじゃな」

「わ、分かりました…」

「じゃあヒントを出すぞ……ヒントは『家族』かのぉ……あとは『仲間』や『絆』、『想い』とかもヒントにはなるかのぉ」

「う～ん……分かりませんね…ちょっと考えてきます」

「分かったら儂の所に言いにくるんじゃ。答え合わせをしてやるからのぉ」

「分かりました。では失礼します」

「……ふぅ、儂も少年のデバイスの作成にかかるとするか……しかし、あやつの能力は何じゃ！？全然チートではないではないか！……まあ、勝手に能力を与えてもよいといわれたしのぅ…早速能力を追加してやるか……しかし、何にしようかの……『王の財宝』にしようかのぅ……いや、それじゃとあやつはチートすぎるとかいって使わなさそうじゃし……よし！あやつの体に『全て遠き理想郷』を埋め込んどいてやろう！！これであやつは死ぬことがほぼ無くなったのぅ……フッフッフッ我ながら名案じゃのぅ！！」

こうして少年の知らないところで少年はチート化されていくのであった…

第０．５話　「最高神登場？」（後書き）

今回も駄文でしたね。
すみません。

第1話　「望み」（前書き）

今回は短めです。

第1話　「望み」

はやてｓｉｄｅ

――汝よ、家族は欲しくないか？

なんやこの声…

――どうなんだ？

欲しい…

――ならば望むがよい、汝の望みが強ければ望みはかなう

それほんまか？

――我の言葉に嘘はない

そうか…

家族が欲しい…お願い…お願いや！！うちに家族を…！！

――……

1人やと寂しいから！辛いから！だから…！！

――……汝の望みは叶った。楽しみにしておくがよい

「夢…？」

はぁ…訳の分からん夢見てもうた…
それにしても何やったんやろか…

「っと、朝ご飯つくらんとな」

気持ちを切り替えてキッチンのあるリビングへ向かった。

「え……」

リビングに入った時に目に入ったのは宙に浮かんで眠っている女の子。

「も、もしかして……」

――――――汝の望みは叶えてやった

「や、やっぱり…ありがとう、ありがとうな…」

今日の夢の出来事は嘘やなかったんや…！！

――――――汝に幸多からんことを

「この子がうちの新しい家族…」

めっちゃ嬉しい…

こんなことがあるなんて奇跡としかいいようがないけど、ほんまに嬉しいわ…

「この子がいつ目ぇ覚ますか分からんから朝ご飯でも作っとくか」

うちはこの子が目ぇ覚ますのを楽しみにしながらキッチンへ向かった。

第1話　「望み」（後書き）

かなり無理やりだったような気がしますが主人公は八神家に仲間入りすることになりました。
なので、無印編は介入するつもりはありません。

第2話　「自己紹介」（前書き）

第2話　「自己紹介」

「ん……？」

ここは？

ああ、そうだ。僕は転生したんだった。

で、ここは何処なんだろう？

とりあえず起きあがってみる。

すると…

「あー！！起きたん！？おはようさん！！」

車椅子を器用に動かして朝ご飯の準備をしている女の子に声をかけられた。

「え、えと……おはよう……ここは？」

「ここはうちん家や！！」

「そうなんだ……」

なんでこの子、朝からこんなにテンション高いんだろう？

「でも何で僕は貴女の家で寝ていたの？」

「ああ！それはな！今日な！変な夢を見てんけどな！そん時にな！変な声が聞こえてな！その声がうちの望みを言えって言われてな！家族が欲しいってお願いしたらな！朝ここにきた時にな！君がおったんや！！」

「え、えと…」

まとめると、今日謎の夢を見たときに家族が欲しいと望んだら、ここに僕が現れたって感じなのかな？

「それじゃあ、僕は今日から貴女の家族になるのかな？」

「うん！そやで！今日から君はうちの妹や！！」

確か今の僕は7歳の状態なんだっけ？
じゃあ妹であって……妹？

「えっと…僕男なんだけど……」

「……」

なんだろう、この沈黙。なんか嫌な予感が…

「えええええええええええええ！？」

あぅ…耳が……

「落ち着いた？」

女の子は僕が男だと伝えた後、十分ほど暴走しました。
まあ、大変でした…
アソコを見られそうになったり、見られそうになったり、見られそうになったり……
とにかく大変でした…

「あ、うん。ごめんな？取り乱して」

「僕は気にしてないから大丈夫だよ。えーっと…」

「ん？どうしたんや？」

「いや、そういえばまだ名前を聞いてなかったなぁと思って」

「そういえばそうやったなぁ…うちの名前は八神はやてや、よろしゅうな」

「えっと、僕はリリィ・ナイトメアっていいましゅっ…あぅ…噛んじゃった……と、とにかく、これからよろしくね？えっと…はやて

お姉ちゃん？」

あぅあぅ…噛んじゃったよ……

めちゃくちゃ恥ずかしいよ…

「あれ？どうしたの？お姉ちゃん」

お姉ちゃんがワナワナと震えている。

何か嫌な予感しかしないんだけど……

「か…か…」

「か？」

「可愛いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」

「ふにゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

嫌な予感的中。

いきなり襲われました。

「ハァハァ…可愛いすぎるでリリィ。お姉ちゃん我慢できんわ…ハァハァ」

「お、落ち着いてよお姉ちゃん！！何か怖いよ！？」

このあとお姉ちゃんが落ち着くのに３０分近くかかった……

ん？僕？何もされてないよ？

第2話　「自己紹介」（後書き）

途中から自分でも何がしたいのか分からなくなりました。
すみません…

第3話　「デバイス登場」（前書き）

今回はリリィのデバイスが登場します。

今回はいつも以上の駄文ですが見ていただけると幸いです

第3話　「デバイス登場」

この世界に転生してから5日たった。

またここか…

僕は今、転生する直前にいた真っ白な空間にいる。

あれ？僕の寝てたはずなんだけどなぁ…

もしかして寝てる間に心臓マヒとか？

「ちがいますよ」

あっ、貴女はあの時の女神さん。

「はい、お久しぶりです」

久しぶり～

で、どうしたの？

もしかしてデバイスができちゃったりしたの？

「はい、そうです。何で分かったんですか？」

えー？だって前にデバイスができしだい届けますって言ってたじゃん

「そういえばそうでしたね」

で、新しいデバイスってどんなの？

「これです」

あれ？これってマイソロ2のニアタだよね？

「はい、そうです。これが貴方のデバイスの待機状態です」

へぇ、これが待機状態なんだ…

……

ねぇ、これってどうやって起動するの？

「知らないんですね」

そりゃそうだよ

だって僕リリカルなのはは知らないんだもん…

「そうでしたね…忘れてました……とりあえずマスター認証とデバイス名称の登録をしてください」

どうやってするの？

「それも知らないんですね…じゃあカンペ用意しましたからその通りに進めてください」

りょーかい

えーっとなになに…

マスター認証

リリィ・ナイトメア

我がデバイスに固有名称を授ける

名称【レディアント】

《マスター認証完了……固有名称登録完了……よろしくお願いしますマスター》

うん、よろしくね？レディアント

「よし、じゃあ試しにセットアップしてもらいますがセットアップの際にジョブの指定もしてください」

うん、じゃあ行くよレディアント、セットアップ・ウォリアー

《ｓｅｔ　ｕｐ》

おお、格好が変わったよ…

これが僕のバリアジャケットかぁ…
それにしても…
ねぇ、女神様。
「何でしょうか？」
何でバリアジャケットが女物なの？
「えーっと……ゼウス様の趣味です…」
やっぱり…
てことは他の職業も…
「はい、女物です…」
はぁ…
「申し訳ありません…」
いいよ、もう…
…あれ？僕の体薄くなってない？
「もうそろそろお目覚めになられる様です」
へぇ…じゃあ今回はここらでお別れってことかな？
「そうですね。…そういえばゼウス様から伝言が…『お主の身体にアヴァロンを埋め込んで置いたから、大いに役立てるがよい』との事です」

え？ちょっと待って…アヴァロンって何な…

「の……」

しまった！！聞きそびれちゃったよ…ｏｒｚ

う～ん…アヴァロンって何なんだろ？

「ねぇ、レディアントは何か知ってる？」

《いえ、私はなにも…》

「そっか…まあ、それは置いといて、これからよろしくね？レディアント」

《こちらこそよろしくお願いします。マスター》

第3話　「デバイス登場」（後書き）

後ほど主人公設定とデバイス設定を投稿します。

第４話　「特訓開始？」（前書き）

今回は説明回みたいな感じになりました…

第４話　「特訓開始？」

レディアントが僕のデバイスになった次の日から僕は特訓を始める事にした。

理由は『守るため』
唯一の家族であるお姉ちゃん、これから出来るであろう友達や仲間、恋人など大切な人を守るために自分の力を使いたい。
まあ、これは前世でグレイセスをした時に思った事なんだけどね。

とりあえず、お姉ちゃんには「お姉ちゃんを守れるくらい強くなりたいから」って言ったら特訓の許可を貰った。

あとの問題は練習場所。
戦士とか剣士は森とかで結界を張れば大丈夫だろうけど、魔術師系はな……ビッグバンとか使ったら尋常じゃないくらいの被害がでそうだし…

悩んだ結果、レディアントに相談してみると《私が張る結界には結界解除時に結界内を修復させる機能がついておりますので、被害を結界内におさめられる術や技なら特訓可能ですよ》と言われたから

近くの森で特訓する事にしました。
ていうか、レディアントももっと早めに言ってくれればよかったのに…

「ふぅ…とりあえず、ウォーミングアップでもするか」

森についたからウォーミングアップをする事にした。
軽くランニングをしてから柔軟をする。

「じゃあ、さっそく始めようかな…レディアント、セットアップ・ウォリアー」

《ｓｅｔ　ｕｐ》

今の段階での目標は戦士や大剣士、聖騎士などの武器が大きく攻撃速度が遅い職業は高速戦闘ができるように、特に大剣士と聖騎士は両手剣を片手で扱っての高速戦闘ができるようになるのが目標。

次に剣士や盗賊、双剣士などの武器を使う手数の多い攻撃が売りの職業はとにかく一撃一撃の威力を高める事が目標。

次に格闘家とモンクの体術を扱う職業はいつでも相手の懐に何時でも入れるように、最高速度と最低速度の差を大きくする為、敏捷力を高める事が目標。

次に狩人やガンマン、海賊などの飛び道具を使う職業は、とにかくデバイスのサポートなしでも的の中心に百発百中で当たるような正確性が目標。

最後に術を使う職業は、詠唱なしで術を使えるようにする事が目標。特に前衛で戦うタイプの職業で術を使うなら詠唱破棄は必須だからね。

目標も立てた事だし目標を達成できるように頑張らないとね。

「よ～し、レディアント、特訓開始だよ？」

第４話　「特訓開始？」（後書き）

終わり方が微妙ですね…

第5話　「翠屋へ行こう」（前書き）

第5話　「翠屋へ行こう」

特訓開始から2か月ほどたった。
特訓の方はかなり順調に進んでいる。
目標の8割ぐらいまでは力が付いたかな？

今日は僕の誕生日。
因みに明日はお姉ちゃんの誕生日。
一日違いだし今日二人まとめてお祝いしようってことになった。
僕は今、最近人気の翠屋というお店にケーキを買いに向かっている。
初めはお姉ちゃんと二人でケーキを作るってことになっていたんだけど、今日病院があることを思い出して断念した。

「……ここ何処だろ？」
只今、絶賛迷子中です。

一回近くを通ったから大丈夫だと思っていたのが間違いだったね。
レディアントを置いてきちゃったのも失敗かな…
「それより、これからどうしよ…」
実は帰り道も分からなくなりました…ｏｒｚ
「うぅ～…どこなのここ～……」
やばい…泣きそう……
「Ｗｈａｔ' ｓ　ｔｈｅ　ｍａｔｔｅｒ？」
「ふぇ？」
泣く寸前のところで急に声をかけられたからそちらの方へ向くと金髪の女の子を先頭に３人の女の子がいた。
「え、えと…あの…翠屋っていう店に行く道が分からなくて……」
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
なのはｓｉｄｅ
私がアリサちゃんとすずかちゃんと一緒に帰っている途中、道の真ん中でキョロキョロと周りを見回してる金髪の女の子を見つけたの。

「ねぇ、アリサちゃん、すずかちゃん、あの子どうしたのかな？」
「さあ？あの様子からして迷子にでもなったんじゃないの？」
「私もそう思う。あの子ここら辺じゃ見たことのない顔だし…」
「迷子なんだったら、助けた方がいいんじゃないかな？」
二人に聞いてみたらそうしようということになったの。
「でも、どうするの？あの子多分外国人だよ？」
「あ、そうだったの。私英語話せないの」
「ふふふ、それならあたしに任せなさい」
そういえば、アリサちゃんってハーフだったっけ…
忘れてたの…
「とにかく行くわよ」
「うん」
アリサちゃんが女の子に近づく。
「Ｗｈａｔ' ｓ　ｔｈｅ　ｍａｔｔｅｒ？」
「ふぇ？……え、えと…あの…翠屋っていう店に行く道が分からなくて…」

この子日本語喋れたんだ……ってそこ私の家の店なの？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

僕は今、なのはさん、アリサさん、すずかさんと一緒に翠屋に向かっている。
ちなみに、名前は3人の会話から判断した。
なんでも、なのはさんの家族が経営しているらしい。

「ここだよ」

お、着いたみたい。
へぇ～、ここが翠屋かぁ。

「ただいま～」

「おかえりなさい、あらその子は？」

なのはさんそっくりな女の人がでてきた。
なのはさんのお姉さんかな？

「さっき道で迷子になってて…うちに用事があるみたいだよ」

「あら、どうしたの？」

「えと…今日が僕の誕生日で明日がお姉ちゃんの誕生日だから今日一緒にお祝いしようって事になってて…だから誕生日ケーキを買いに…」

「そうなの。お名前は？」

「えと…僕がリリィでお姉ちゃんがはやてっていうの」

多分チョコレートのプレートみたいなのに名前を書くんだろう。

「リリィちゃんにはやてちゃんね？」

「いや、僕は男だからちゃんじゃなくて君です」

「あら、そうだったの。ごめんなさいね」

「いえ、よく間違えられるんで」

ん、なんか嫌な予感が……

「「「えええええええええええ！？」」」

「ふにゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？！」

しばらくして店員さんがケーキを箱に詰めて持ってきた。
お姉ちゃんの時みたいに暴走した三人は、落ち着いたあと、お喋りするために三人で店の奥の席へいったみたい。

「はい、どうぞ。誕生日おめでとう」

「ありがとう」

「じゃあ、気をつけて帰ってね」

「はーい」

こうして僕はお姉ちゃんを迎えに行く為、翠屋を後にした。

第5話　「翠屋へ行こう」（後書き）

早いですが、次はヴォルケンリッターとの邂逅になると思います。

閑話　「新たな転生者？」（前書き）

今回はやっちゃったぜって感じの話です。

閑話　「新たな転生者？」

「ここは……？」

私は確か……

「おお、来たか」

思慮に耽っていると、突然目の前に老人が現れた。

「貴方は…？」

「儂か？儂は神じゃ」

神？

この老人は何を言っているんだと思ったが、聞きたいこともあるので話を進めることにした。

「それで、神様にお聞きしたいのですが、ここは何処でしょうか？それに私は死んだ筈では……」

「ここは何処かか…名はないのじゃが、強いて言うなら転生の間とでも言おうかのぅ……」

「転生の間？」

「ああ、転生の間じゃ。ここは特殊な転生をする者が来る場所じゃ。ちなみにここへはお主が死んだ時に儂がよんだ。」

なるほど、やはり私は死んだのか…

「それで、特殊な転生とは？」

「ああ、本来なら前世の記憶を消し、元の世界で赤子からやり直すのじゃが、今回はかなり特殊でのぉ、前世の記憶を持ったまま、同じ姿で別の世界へいってもらう。まあ、簡単に言えば今の状態で別世界に移動してもらうってことじゃ」

「はあ、しかし何故そのようなことを？」

「それはのぅ…まあ、あるやつを助けてやって欲しいのじゃ」

「助ける、ですか？」

しかし、何故私が？別にそんなことは誰にでも出来るのではないのだろうか……

「いや、儂はお主じゃから頼むんじゃよ。セイバー、いや、アーサー王かの？」

「！？何故私の名を！？」

「何故って言われてものぅ、お主をここへよんだのは儂なんじゃから知っててもおかしくはないじゃろう」

あ、確かに……

「それで、頼まれてくれるかのぉ」

「私は構いませんが、いったい何をすれば良いのでしょう？」
「お主にはユニゾンデバイスというものになってもらい、リリィというものを支えてもらいたい」
「そのリリィと言うものがあなたが助けて欲しいといった者ですか？」
「ああ、そうじゃあやつもお主とは少し違うが特殊な転生をしておっての、前世の記憶を持っておる。それであやつの場合前世では酷く残酷な人生を送っておってのぅ、そのせいか酷く心が脆い」
「それでは、その者の心が壊れないように支えればよいのですか？」
「そうじゃ」
「分かりました」
「それでは、そろそろ転生させるぞ」
私を光が包み込んでいく。
次のマスターはどんな方なのだろうか…
シロウのような方だといいな…
side out
神side

「ふぅ…行ったのぅ」

まあ、転生させる理由はあんな感じでよかったかのぅ。

「まあ、実際は面白そうじゃったから転生させただけなんじゃけどなｗｗｗ」

どうなるか楽しみじゃｗｗ

閑話　「新たな転生者？」（後書き）

本物セイバーだしちゃいました。

同じ容姿のキャラがでてきたら面白そうじゃね？とか思ってやっちゃいました。

Ａｖｅｌ様から感想第一号を頂きました。

初めての感想だったので喜びで異様なほどテンションが上がりました。

ありがとうございます。

感想や評価、ご指摘などがありましたら宜しくお願いします。

第6話　「セイバーとの邂逅」（前書き）

今回は微妙です…

第6話　「セイバーとの邂逅」

あのあと、何事もなく家に帰ってお姉ちゃんと二人だけで誕生日パーティーをした。

パーティーと言えるようなものじゃなかったけど、二人で誕生日に歌うあの歌を歌ったり、ケーキを食べたり、プレゼント交換をしたりと楽しめた。

お姉ちゃんからのプレゼントは黒いリボンだった。これから大切に使おうと思う。

因みに僕がお姉ちゃんにプレゼントしたのは、お姉ちゃんが前に欲しいと言っていた本と、お姉ちゃんの似顔絵をプレゼントした。

お姉ちゃんは僕の絵の上手さに驚いていたけど、泣きながら喜んでくれた。

誕生日パーティーが終わったあと片付けをして風呂にはいった後、いつも通り二人で寝た。

「ふぁぁぁ……うぅ…トイレ行きたい…」

その日の夜中に僕は目が覚めた。

やばい…尿意がすごいよ…

ジュース飲み過ぎたかな？

「とにかく、早くトイレに行かないと…」

お姉ちゃんの腕をどけて……って結構がっしりホールドされちゃってるな…

「お姉ちゃん、お姉ちゃん」

「ん……どないしたん？リリィ」

「あの…トイレに行きたいからどいてほしいんだけど…」

「分かった…」

「ありがとうお姉ちゃん」

よかった…これでトイレに行けるよ…

「漏らさんようにな～」

「わ、分かってるよ／／／！！」

僕は恥ずかしくなって急いで部屋から出ていった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

はやてｓｉｄｅ

リリィはほんま可愛いなぁ～
ちょっとからかっただけで顔真っ赤にして出ていきよったで。
「あんな弟ができて嬉しいわ～」
抱きまk……リリィが戻ってくるまで待つか。
「な、なんや！？地震か！？」
急に揺れが襲ってきた。
『封印を解除します』
本から声が聞こえてきた。
『起動』
急に体の中から何かが抜けたと思ったら、うちの意識は徐々になくなっていった…
side out
「ふぅ～、スッキリしたぁ～」
危ない危ない、あともう少し遅かったら漏れちゃうところだったよ。

それにしてもさっきトイレにいたとき揺れたけど、お姉ちゃん大丈夫かな？

――――――――――――ドクンッ

「！？」

なんだ！？
今急に心臓が……

「うわっ！？」

目の前が急に光だした。

「一体何が起こって…」

やがて光が収まるとそこには…

「へ…」

僕と全く同じ顔の人が立っていた。

「ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

「お、落ち着いてください」

「な、何で同じ顔の人が！？もしかして僕無意識の内に分身の術とか出来るようになって使っちゃったの！？いや、でもこの人の方が背が高いし着てる服も違うし…」

「落ち着いてください！」

「は、はひぃ！！……あぅぅ…噛んじゃった…／／／」

「と、とりあえず落ち着きましたか？」

「う、うん」

噛んだら落ち着きました。すごい恥ずかしいけど…

「それでは、私の自己紹介を…私はユニゾンデバイスのセイバーと申します。よろしくお願いします。マスター」

「マスター？」

「はい、私はあなたのユニゾンデバイスですので」

「へ？どういうこと？」

「どういうことと言われましても……あ、そういえば、これを神という方が渡せと…」

混乱してる僕にセイバーさんは手紙を渡してきた。

とりあえず開けてみると…

『儂からの誕生日プレゼントじゃ♪ｂｙゼウス』

とまあ、こんなことが書いていた訳で…

「大体は理解できたよ」

「そうですか、これからどうしましょう」

う～ん…これからどうしよ…

お姉ちゃんには何て紹介しようか…

「ねぇ、セイバーさん」

「なんでしょう？」

「セイバーさんは僕のお姉ちゃんってことにしてくれないかな？」

「は？私が姉ですか？」

「うん」

「それは何故ですか？」

「それは、僕には一応お姉ちゃんがいるんだけど、お姉ちゃんには魔法のこととか言ってないから、ユニゾンデバイスって言うわけにもいかないんだ…」

「なるほど、ならば私がマスターの姉と言うことにしておきましょ

う」

「むぅ……」

「どうしたのですか？マスター」

「僕のことはリリィって呼んで！！それと敬語は禁止！！」

「は、はい。ですがリリィ、私は敬語で喋るのが癖になっていますので…」

「むぅ…それじゃあ仕方ないか……じゃあお姉ちゃんの所にいこう」

「はい」

こうしてはやての部屋に戻っていく。

「お姉ちゃん戻った…よ…？」

僕がお姉ちゃんの部屋に戻ると、意識を失っているお姉ちゃんと４

人の知らない男女がいた。

第6話　「セイバーとの邂逅」（後書き）

セイバーがなんの違和感もなくこの世界に馴染んでいるのは、セイバーが神様に転生させられる際に頭の中に情報が入ってきているからです。

感想や評価、ご指摘などがありましたら宜しくお願いします。

第7話　「ヴォルケンリッターとの邂逅」（前書き）

今回も駄文です。

第7話　「ヴォルケンリッターとの邂逅」

何でお姉ちゃんは倒れているんだ？
この人たちは誰なんだ？

この人達がお姉ちゃんを襲ったのか？
……いや、それはないか…
現に今金髪の人が看てるし…

「貴様は誰だ？」

いきなりピンクの髪の人がこっちに剣を向けて聞いてきた。

「ええと、僕はリリィ・ナイトメアって言いましゅっ……」

「……」

「あぅぅ……噛んじゃった……／／／」

最悪だ……こんな緊迫した場面で……

「そ、それで貴様は主とはどういう関係だ（か、可愛い…）」

「姉弟だけど……」

お姉ちゃんが主？

「嘘つけ！！全然似てねえじゃねぇか！！」

赤い髪の女の子が突っかかってきた。

「いや、それは実の姉弟じゃないし…」

「じゃあ何で姉弟なんだよ！！」

「そ、それは…」

この事って説明しにくいんだよね…

「とりあえずお姉ちゃんが起きてから話し合わない？そっちの方が説明もしやすいし…」

聞きたいこともあるしね

「……分かった。それでは、主の目が覚めるまで待とう」

「へぇ～……これが闇の書言うんか～……」

「はい。ご命令をいただければ、今すぐにでも蒐集を」

お姉ちゃんが起きたので僕がお姉ちゃんの弟であることを何とか証明し、セイバーさんを紹介して、今は闇の書の話になっている。

初めはヴォルケンリッターの人達に闇の書を狙うものではないかと警戒されていたみたいだけど、闇の書って何？ってなったから警戒はなくなったみたい。

「う～ん…。分かったことが一つだけあるんよ。闇の書の主としてみんなの衣食住、しっかり面倒みなあかんちゅうこと。幸い料理は得意やし、住むところもある。可愛い弟もおるしな」

お姉ちゃんは僕の方を向き、僕の頭を撫でる。

「うん。じゃあこれからは家族だね！！シグナムさん、ヴィータさん、シャマルさん、ザフィーラさん、それにセイバーさんもよろしくね！！」

こうして今日、八神家は2人から一気に7人にまで増え、僕の守りたい人達も増えた。

第7話　「ヴォルケンリッターとの邂逅」（後書き）

しばらくは日常編になると思います。

感想や評価、ご指摘などがありましたら宜しくお願いします。

リリィの日記？（前書き）

更新遅くなりました（｜＿｜；）
すみません｜（。｜。）｜

今回は微妙かもです…

リリィの日記？

シグナムside

闇の書が起動してから数日、我々は主はやての家族として徐々に馴染めてきた。

「リリィ、風呂が空いたぞ」

私は今、リリィに風呂に入るようにと、部屋の前まで呼びにきている。

リリィは主はやての弟だ。
主はやてが言うにはある日突然、光と共に現れたらしい。
初めは警戒していたが、特に怪しい動きを見せなかったので信用することにした。

「……」

む…いつもならすぐに返事をしてくるのに今日はないぞ…
どうかしたのか…？

「リリィ、入るぞ……」

心配になり部屋に部屋に入ると、リリィが机に突っ伏して寝ていた。

「すぅ…すぅ…」

「寝ていたのか」

特に心配するような事でもなかったので、安心しリリィに近づく

「リリィ、風呂が空いたぞ、起きて入ってこい」

「……」

優しく声をかけるが起きる気配がない。

《すみません。今日は珍しくマスターもお疲れだったようで寝てしまいました》

「そうか…なら寝かせておいた方がいいな…」

リリィのデバイス、レディアントにそう言われたので、起こすのは諦め、ベッドで寝かせようとリリィを抱き上げる。

「ん？日記…？」

リリィを抱き上げると、下敷きになっていた日記帳をみつけた。

「ほぅ…リリィのやつ、日記等を書いていたのか」

ふふふ…気になるな……

リリィが寝てるうちに読もう。

ばれなければ問題ないだろう。

リリィをベッドに寝かせ、机に置いてある日記を読みにいこうとするが、リリィに服を掴まれ動きがとまる。

「起きているのか？」

「…………」

《恐らく無意識のうちに掴んだのでしょう。マスターは独りが苦手ですから…》

「独りが苦手？何かあったのか？」

《はい…ですがその事は私から言えるほど軽いものではないので…》

「そうか…ではその事はリリィが話してくれるまで待つとしよう」

そんなことより今は日記だな。

幸い机はベッドに近いので手を伸ばし日記をとり、ベッドに腰かける。

「どれどれ…」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

4月15日

今日、神様からデバイスをもらった。
名前はレディアントにした。

これで守る力が手にはいった。
これから鍛えていかないといけないな…
今度こそ大切な家族を守れるように、あの時みたいな思いはしないように…

４月１６日

今日から特訓を開始した。
初めてレディアントを試したから楽しかったな。
楽しすぎてレディアントに怒られるくらいやりすぎちゃった♪
まあ、仕方ないよね楽しかったんだし♪
そんなことより、レディアントにフォームを１６種類も作る必要あったのかな？
絶対使いこなせないよね。

～～～～～～～～～～

４月２７日

今日は初めて術の詠唱破棄に成功した。
にしても…上級術が使いたい…オーバーリミッツも使いたい…秘奥義も使いたい…
本気で使ったら世界が滅びる可能性があるってどんだけ強いんだよ…
ていうか考えてみたら、まだ全然使いこなせてないな…
よし、もっと使いこなせるように頑張るぞー！

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

5月11日

ようやく初級術を全部詠唱破棄で使えるようになった。
明日からは初級術の威力を上げつつ、中級術の詠唱破棄の練習をしていこう。
今でようやくゲームで例えたら30レベルくらいなんだろうなぁ…
まだまだ道のりは険しいよ…

P．S．
最近お姉ちゃんがよく胸を揉んでくるせいか、胸がちょっと膨らんできたようなきがする…
僕は男なのに…
女の子みたいに大きくなったらどうしよう…

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

５月１８日

今日は両手剣を片手で振れるようになった。
これで無双ができるようになる日も近いかも…
とにかくもっと速く振れるようにしないといけないかな。

P．S．
双大剣士という職業を思いついたんだけど、どうだろう？
双剣士の武器が大剣バージョン。
最強だと思うんだけどやっぱり無理かな？
………ていうか、僕誰に聞いてるんだろ…

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

５月２０日

今日は久しぶりにお姉ちゃんと一緒にショッピングセンターに服を買いに行った。
いい加減男性用の服も買ってほしい。
何で男女兼用の服とか女性用の服しか買ってくれないんだろう？
服を買ったあと、楽器屋を見つけたので少し立ち寄らせてもらった。

ピアノを弾いていたら店員さんやお客さんがだんだん集まってきてたみたいで演奏が終わった時に、拍手をしてくれた。
弾くのに夢中で気付いていなかったからビックリしちゃったよ。
久しぶりにピアノ弾けてよかったなぁ。
ちょっとだけ昔のことを思い出しちゃったけど…
ピアノ買ってもらえるかだめもとで聞いてみようかな…

P．S．
今日いつの間にかお姉ちゃんがコスプレ服をいっぱい買っていた。
どうせ僕に着せるために買ったんだろうな…
着る機会がないことを願う。

～～～～～～～～～～～～～～

5月27日

今日、全ての中級術の詠唱破棄ができるようになった。
これで50レベ位まで上がったかな？
にしても……上級術の練習したいよぉ…
やっぱり中級術までって上級術と比べるとしょぼいんだよね～
僕としてはビッグバンとかメテオスウォームとかをぶっ放して派手に決めてもみたいんだけどね。
まあ、上級術は使うときがくるまで我慢するか。

～～～～～～～～～～～～

6月4日

今日はなんと家族が5人も増えた。
シグナムさんにヴィータさん、シャマルさんにザフィーラさん、あとセイバーさん。
シグナムさんとセイバーさんは雰囲気が似ていたなぁ。
真面目そうな感じで…
ちょっと堅物そうな感じもしたけど頼りになるお姉ちゃんって感じもしたから気にしない。
ヴィータさんは面倒見が良さそうだった。
ちょっと怒りっぽさそうだったけど。
シャマルさんは優しそうだったな。
けど、おっちょこちょいのオーラがでていたような気がする。
ザフィーラさんは……うん、しっかりしてそう。
みんな魔法が使えるみたいだけど、どれくらい強いんだろ？
まあ、みんながどれだけ強くても僕が守らなきゃ。

～～～～～～～～～～～～

6月13日

今日もいつも通り特訓をした。
今日初めて知ったんだけど、僕ってまだ対人戦とかしたことなかったみたい。
2ヶ月間飽きずにずっと一人で特訓してたなんて自分でもビックリだね。
それより、一人でしか特訓してないから周りがどれくらい強いか分からないんだよね…
誰か手合わせしてくれる人いないかなぁ…

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「リリィの奴特訓なんかをしていたのか……にしても、いつしていたんだ？ 気付かなかったんだが…」
《マスターは特訓に出掛ける際、友達と遊びに行ってくると言っていますのでそれで気付かなかったのでは？》
なるほど、確かにいつも遊びに行っているが、日記には特訓の事ばかりで友達と遊んでいる事が一切書かれていないな。
「だが何故わざわざ隠す必要があるんだ？」
《おそらく、マスターはあまり力をみせたくなかったのだと思います。彼や私の力は少し異質ですので》

「そうなのか……」

異質？

確かに日記を読んでいる限りレディアントは特殊なデバイスだということが分かるが、リリィは何が異質なんだ？

「よし、明日からは私が特訓に付き合ってやる」

《いいのですか？》

「ああ、日記にも書いていたしな。リリィには明日言えばいいだろう」

《それでは、よろしくお願いします》

「ふふふ、明日が楽しみだな」

これで久々に戦える。

「しかし、リリィのやつまだ放してくれないのか……」

どうしたものか……

《添い寝してあげてはどうですか？》

添い寝か……してやるのもいいかもしれないな／／／／

よしリリィ、お姉ちゃんが添い寝をしてやるぞ／／／

《（ふふふ、面白い人ですねシグナム様は♪）》

こうして私はリリィの隣で眠りについた…

リリィの日記？（後書き）

最後の方、レディアントとシグナムのキャラを崩しちゃいました…

次はバトルシーンの予定です。

VS．シグナム（前書き）

今回は初バトルです。
あんまり上手くできなかった……ｏｒｚ

VS・シグナム

「ふっ、はっ、せぇい！魔神剣！魔神剣・双牙！魔神連牙斬！！」

やっほー、リリィだよ♪
今現在特訓中なんだ。

それにしても、今日の朝はビックリしたなぁ。
朝起きたらシグナムさんの抱き枕になっていたんだもん／／／
何故かドキドキしちゃったんだよなぁ／／
何でだろ？
お姉ちゃんの抱き枕にされてるときは何とも思わないのに……
まあそんなこと考えてるんだったら特訓に集中しよう。

「！！」

誰かが結界のなかに入ってきたな……
ん？この魔力はシグナムさん？
とりあえず待ってみよう……

「おお、リリィここにいたのか」

やっぱりシグナムさんだった。

「なんでシグナムさんがここに来たんですか？」

「いや、そのだな、昨日リリィをベッドに運んだ時に、リリィの日記を見つけてな、そこに特訓相手が欲しいみたいな事を書いていたから私がなってやろうと思って来たわけだ」

へぇ～なるほど……

ん？

「日記を見たんですか？」

「ああ、すまないな。勝手に見てもいいものではないと分かっていたんだが、つい、な」

ふえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！

見られちゃったの！？

あの日記結構恥ずかしいこと書いてたような気がするのに！

特に双大剣士とか！！

どんなネーミングセンスしてんだよ！って自分に突っ込みたくなるし！

それにシグナムさんが堅物とかお姉ちゃんみたいとか書いちゃったし！

恥ずかしすぎて死ねそうだよ……

「と、とりあえず落ち着けリリィ」

「落ち着いたか？リリィ」

「うん……」

「その…なんだ、すまなかったな、勝手に日記を見てしまって」

「もういいよ、日記書きながら寝てた僕も悪いんだし……」

迂闊だったなぁ……これからは気を付けないと

「そ、そうか」

「そんなことよりも、本当に手合わせしてくれるの？」

「ああ、もちろんだ」

「それじゃあ早速始めようよ」

「ああ、別にかまないぞ」

よし、これで自分の実力が確かめられるね。

「ルールは結界を壊さなければなんでもありね」

「わかった。いくぞレヴァンティン」

《ｓｅｔ　ｕｐ》

シグナムさんがバリアジャケットを展開する。

「よし、じゃあ始めようシグナムさん」

「いや、まて。何故バリアジャケットを着ないんだ？」

「えっと、いや…その……」

女物だからって言うのは恥ずかしいしなぁ…

「バリアジャケットがないと危険だぞ？それに来てくれないと私が手加減せざるをえなくなる」

手加減されるのは嫌だしなぁ……

仕方ないか…

「うぅ…分かったよ……」

僕は諦めてバリアジャケットを展開した。

「あぅ……」

「なんだ、その、可愛いバリアジャケットだな／／／」

「僕は男だからそんなこと言われても嬉しくないよ……」

「す、すまない」

「と、とにかく早く始めようよ」

「あ、ああ、そうだな」

シグナムさんが構えたのを見て僕も構える。

「じゃあ、いくよ！！」

「こちらからもいくぞ！！」

まずは奇襲もかねて…

「魔神剣！！」

こちらに向かってくるシグナムさんに向かって剣を振り衝撃波を放つ。

「なっ！？くっ！」

くそっ、避けられたか…

けど無理に避けたせいで僅かながらも隙ができた。

「そこだ！空破衝！！」

一気にシグナムさんに接近し強力な突きを放つ。

「くらうか！！」

ガキィィィン！

僕の突きをシグナムさんはレヴァンティンで防ぐ。

だけど……

「はあぁぁぁぁぁぁ！！」

「なっ！？ぐあっ！！」

シグナムさんは突きの衝撃に耐えられず吹っ飛ぶ。

だけど、さすがシグナムさん。

空中で体勢を立て直しなんなく地面に着地。

う～ん…色々試したいし剣士はここら辺までにしておいて他の職業にでもするか…

「レディアント、ジョブチェンジ」

《ｊｏｂ　ｃｈａｎｇｅ》

「ラージフェンサー」

一瞬光に包まれ僕の姿が変わる。

「姿が変わった……なるほどそれがレディアントの能力か…」

「そうだよ……まだまだいくから覚悟してよね！」

そう言って僕はシグナムさんに向かって突っ込んでいく。

「なめるな！！」

シグナムさんが僕にカウンター気味に攻撃をしようとする。
なら

「無影衝！！」

「何っ！？」

僕が一歩下がったためシグナムさんの攻撃は空を切る。
そして僕は前方をなぎ払う。

「ぐあっ！！」

もう一度シグナムさんを吹っ飛ばした。

「くっ！ならば！レヴァンティン！カートリッジロード！」

《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．　Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ》

レヴァンティンの形状が変わった。
あれは……連結刃か？

「飛竜一閃！」

「くっ！ならこっちは、幻魔衝裂破ぁ！！」

こちらも威力の高い技を使い、相殺させる。

「これも効かないのか……ならば！レヴァンティン、カートリッジロード！！」

《Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｌｏａｄ．　Ｂｏｇｅｎｆｏｒｍ》

レヴァンティンが弓の形に変わった。

相手が弓ならこっちも

「レディアント、ジョブチェンジ！」

《ｊｏｂ　ｃｈａｎｇｅ》

「アーチャー！！」

再び光に包まれるとまた姿が変わる。

「ほう、そちらも弓か」

「そうだよ！けど、次の攻撃で決めさせてもらうよ！！はあぁぁぁぁぁ！！」

そう言って僕はオーバーリミッツを発動させる。

「凄まじい闘気だな！ならばこちらもそれに応えるまでだ！レヴァンティン！！」

《Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｌｏａｄ》

「翔けよ、隼！！」

「その目にしかと焼き付けな！」

《Ｓｔｕｒｍｆａｌｋｅｎ》

「潰す！ワイルドギース！！」

シグナムさんの放った矢と、僕の放った炎を纏った無数の矢がぶつかり合う。

「いっけぇぇぇぇぇぇぇ！！」

「何！？」

ぶつかり合った結果、僕の矢がシグナムさんの矢を破壊し、そのままシグナムさんに向かって進んでいき、直撃した。

「ぐあぁぁぁぁぁ！！」

技をくらったシグナムさんは地面に膝をつく。

「はぁ……はぁ……私の…負けだな……」

「そうだね」

シグナムさんの側へ近づいていく。

「っ！」

シグナムさんが倒れそうになったので反射的に抱き止める。

「大丈夫？」

「あ、ああ大丈夫だ／／／」

顔真っ赤だけど本当に大丈夫なのかな？

「そう？でも一応治癒術をかけておくね？レディアント、ジョブチェンジ」

《ｊｏｂ　ｃｈａｎｇｅ》

「ヒーラー」

すぐに僧侶に変わる。

「心気を癒し整えよ！万象活性！キュア！！」

シグナムさんが光に包まれ、傷が癒えていく。

「これはすごいな……シャマル以上の治癒術じゃないか？」

「シャマルさんって治癒術を使えるの？」

「ああ、シャマルはサポートに特化しているからな」

「へぇ、そうなんだ。一回ヴォルケンリッターのみんなと戦ってみたいなぁ」

「そうだな。今度セイバーも入れて５対１で模擬戦でもしてみるか

？」

「あはは、楽しそうだね…」

それだと僕が勝てないよ…

「ふふふ、そうだな。……さて、そろそろ帰るか…」

「うん、帰ろ……う……」

あれ？急に体が重く……

「リリィ！？大丈夫か！？おい！リリィ！」

「あはは……ごめんね…シグナムさん……ちょっと休んでもいいかな…？」

やばい…本当に意識が保てないや……

シグナムｓｉｄｅ

「おい！しっかりしろ！リリィ！！」

大変なことになってしまった。

リリィが倒れるなんて…

何が原因なんだ？
手合わせではリリィの圧勝だったというのに……

「リリィ！リリィ！返事をしろ！」

息をしているから死んではいないのは分かっているのだが、何故か不安が込み上げてくる。

《落ち着いてください！シグナム様！》

「し、しかしリリィが！」

《マスターなら大丈夫です！それにマスターが目を覚ました時にあなたにそんな顔をされていたらマスターが悲しみますよ？》

「そう…だな……ならば目を覚ますまでここで少し休むか……しかし、何故倒れたんだ？そこまで疲労していなかったように思えるが…」

《原因はオーバーリミッツでしょう》

「オーバーリミッツ？」

《まあ、簡単に言えば稀少技能です。最後に急に闘気が溢れだしたでしょう？あれがオーバーリミッツです。あれは、一時的に魔力量が無限になるのですが、解除したあとに、反動がくるのです。マスターは今日初めて使ったので反動に耐えられなかったのでしょう》

「そんな稀少技能があったんだな……」

《はい、これもマスターの異常な力の１つです》

確かに異常といえば異常だが……

ん？

「まだあるのか？」

《ええ……例えば、先程の手合わせでのマスターのうごきをみてどう思いました》

「７歳にしては凄いと思うがあれくらいなら魔力で身体能力を強化すれば出来なくはないと思うが……」

《シグナム様、マスターのあの動きは全て自らの身体能力だけです》

「何！？」

《むしろ、魔力でリミッターをかけて力を抑えています》

「そこまでなのか……」

《ええ、私の見立てではリミッターなしだと、魔法を使わずにヴォルケンリッターとセイバー様を一瞬で殺すこともできると思います》

レディアントの言葉に私は呆然とすることしかできなかった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「うぅ……」

ここは？

僕は確かあの時気を失って……

とりあえず起き上がってみる。

「リ、リィ……？」

振り返ると目の周りが真っ赤になったシグナムさんがいた。

「シグナムさん？」

「リリィ！！」

「うにゃあ！？」

突然、抱き締められた。

「ど、どうしたの？いきなり…」

「心配…したんだぞ……」

僕を抱き締めている体が震えている。

泣いているのかな……

「急に倒れたときは、一瞬死んだんじゃないかと思った……死んではいないと分かってからもいつまでも目を覚まさないから一生眠っ

たままになるんじゃないかと……本当に……心配…したん…だぞ……」

やっぱり泣いているんだ…

「心配してくれてありがとう」

僕のことを心配してくれる人がいたんだ…

それだけでも嬉しいな……

「家族なのだから心配するのは当たり前だ」

「それもそうだね……ねぇ」

「どうした？」

「これからシグナム姉って呼んでもいいかな？」

「ああ、構わないぞ」

「それじゃあ改めてよろしくね、シグナム姉」

「ああ／／／」

「では、そろそろ帰るとするか」

あれからシグナム姉が落ち着くまでそのままの状態でいた。

「うん、それじゃあ帰ろう……あれ？」

シグナム姉が立ち上がったから僕も立ち上がろうとしたけど足に力が入らず立つことができなかった。

「全く……」

「ひゃっ！？」

シグナム姉がやれやれといった感じで僕を抱き上げた。

お姫様抱っこで……

「シ、シシシシグナム姉！？ななななんでお姫様抱っこなの！？／／／」

「何か問題でもあるのか？」

「恥ずかしいよぅ…／／／／」

「ふふ、無茶をしたお仕置きだ。我慢しろ」

「うぅ……／／／シグナム姉の意地悪」

「私を心配させるのが悪い」

それからお喋りをしながら家まで帰っていった。
お姫様抱っこで……

VS．シグナム（後書き）

最後の方は姉弟の絆が深まりましたと言う話にみえたらいいのですが……

技の解説

魔神剣
武器を高速で振りぬき地面を這う衝撃波を放つ技。
『テイルズオブ』シリーズの代名詞的な技で、様々な派生技が存在する。

魔神剣・双牙
魔神剣を2連続で放つ技。

魔神連牙斬
魔神剣を三発連続で放つ技。

空破衝
強力な突きで敵を吹き飛ばす技。

無影衝
一瞬下がってから前方をなぎ払う技。

幻魔衝裂破
巨大な真空交差斬りをくりだす技。

ワイルドギース（秘奥義）
炎を投げて太陽を作り上げた後、無数の炎の矢を放つ技。
なお、今回は太陽は作っていない。
セリフはテイルズ　オブ　デスティニー2からナナリーのものを使用。

キュア
癒しの光で回復させる術。
本作では上級治癒術という設定。
詠唱はテイルズ　オブ　エクシリアからレイアのものを使用。

VSヴィータ

やっほー、リリィだよ♪

現在八神家全員でとある無人世界にいるんだ。

なんでそんなことになったかって？

実はね、他のみんなにばれちゃったんだ。

あの後、結局家に着くまで体が動かなかったからシグナム姉に抱っこされたまま家に帰るとみんなから予想以上に心配されちゃって……それでシグナム姉が事情を話してばれちゃったって訳。

それからシグナム姉に勝ったって言ったらヴォルケンリッターのみんなが驚いて、はやて姉がみんながどれくらい強いか見てみたいって言って何故か僕がみんなと模擬戦をすることになって今に至る。

「よし、ではまずはヴィータ、ザフィーラ、セイバーとそれぞれ一対一で戦ってもらうとするか」

「うん、分かったよ」

「よっし、じゃあまずはあたしからだな」

「よろしくね、ヴィータ姉」

「お、おう……まだ慣れねえなその呼ばれかた……」

「そうなんだ」
まあ、呼ぶようになったのは昨日からだし仕方よね。
「じゃあ二人とも準備をしてくれ」
「ああ、いくぜ、グラーフアイゼン」
《ｓｅｔ　ｕｐ》
ヴィータ姉がセットアップする。
「おお～、うちがデザインした服や～」
なんかはやて姉が感動してる。
そういえばヴォルケンリッターのバリアジャケットってはやて姉が考えたんだっけ……
「こっちもいくよ。レディアント、セットアップ・ウォリアー」
《ｓｅｔ　ｕｐ》
僕もセットアップする。
「ブハッ！！リリィが女装してる……」
「う、うるさい！」
ていうかなんで女性陣は顔が赤いの……
しかも、はやて姉とシャマル姉は鼻血でてるし……

「よし、二人とも準備はできたな」

「あ、ああ」

「うん」

二人とも距離をとって構える。

「では……始め！！」

「魔神拳！！」

まずはシグナム姉の時と同じ様に離れたところからの攻撃をしたが…

「こんなもん効くか！！」

ヴィータ姉にあっさり打ち消された。

「うらあぁぁぁぁぁ！！」

ヴィータ姉がそのまま突っ込んできてグラーフアイゼンを降り下ろしてくる。

「くっ！」

僕はそれを受け止める。

シグナム姉より一撃が思いな……

「はあっ！」

グラーフアイゼンを弾き一度距離をとる。

「剛・招・来！」

剛招来を使い攻撃力をあげる。

「何したかわかんねぇけど、こっちから行くぜ！」

再び突進してくる。

「爆砕斬！」

僕は地面にレディアントを叩きつけ、石礫を飛ばす。

「なっ！？うわあぁぁぁ！」

予想外の攻撃だったのかヴィータ姉は防御をできず、吹っ飛ぶ。

「まだまだ模擬戦が続くし、早めに終わらせてもらうね。レディアント、ジョブチェンジ」

《ｊｏｂ　ｃｈａｎｇｅ》

「パラディン」

僕は聖騎士に変わる。

「ブハッ！！今度も可愛いなぁ」

またはやて姉が鼻血を噴き出したけど気にしないことにする。

「こんなに早く終わらせてたまるかよ！」

《Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ》

ヴィータ姉が鉄球のようなものを打ってきた。

「くらわないよ。デルタレイ」

詠唱なしでデルタレイを放ち鉄球と相殺させる。

「くそっ！」

「一気に終わらせるよ」

僕は瞬時にヴィータ姉に近づく。

「何！？」

「幻龍斬」

「がはっ！」

突きながら前進し、背後に回り込んで二度切りつける。

「崩龍衝裂破」

「ぐあぁぁぁぁぁ！！」

僕はさらに切り抜けを三連続で繰り出し追い撃ちをかける。

「勝負あり、かな？」

ヴィータ姉に剣を向けながら言う。

「ああ、あたしの負けだ」

「勝者、リリィ！」

ふう、結構疲れるな…

最後まで体力もつのかな……

VSヴィータ（後書き）

あっさりしすぎかな？

技の解説

魔神拳
拳から衝撃波を放つ技
魔神剣の拳版

剛招来
攻撃力を上昇させる技

爆砕斬
大地に衝撃を与え岩片を吹き飛ばす技

デルタレイ
３つの光弾を撃ちだす初級術

幻龍斬
滑るような前進突きからの２連斬りを繰り出す技

崩龍衝裂破
衝撃波を伴った三連続の斬り抜けを繰り出す技

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6276x/

僕の知らない世界にて

2011年11月11日16時26分発行